新たな方程式!
“アート＋(特産品×観光)＝鹿児島の活性化”

河口先生がデザインしたCGアートの着物を会場に展示しました。

東京大学大学院教授の河口洋一郎さんと、女優の愛華みれさんは共に鹿児島県出身。芸術の分野で活躍する二人のトークショーが、9月3日に鹿児島市の城山観光ホテルで行われました。

【パネラー】 河口 洋一郎 氏

1952年、鹿児島県種子島生まれ。2000年より東京大学大学院情報学環教授。2012年より鹿児島県霧島アートの森館長（兼務）。1970年代のCG黎明期から研究制作に着手。1982年の自己増殖する造形理論「グロースモデル（The GROWTH Model）」の発表で世界的な評価を得る。自己増殖する有機的形態と高画質の濃密度感の創出を特徴とする作品を連続で発表。豊かな極採色と躍動感あふれるダイナミックな映像「河口ワールド」は国際的に大きな賞賛を得ている。

【パネラー】 愛華 みれ 氏

鹿児島県南大隅町出身。1985年、宝塚歌劇団「愛あれば命は永遠に」で初舞台を踏み、1999年「夜明けの序曲」にて花組男役トップに就任。華やかな顔立ちと美しい立ち姿の正統派男役として活躍する。2001年11月「ミケランジェロ」「VIVA！」にて宝塚歌劇団を退団。退団後は舞台やドラマなどで幅広く活躍。また2008年に発症した病を克服して同年に復帰。著書に『てげてげ。「良い加減」なガンとの付き合い方』がある。鹿児島県から薩摩大使に委嘱される。

お二人にとっての芸術とは何でしょうか？

【愛華】私は未熟児で生まれてきたので、ずっと「生きる」というテーマが根底にあったように思います。また田舎で育った経験はかけがえのないものです。大自然の美しさや毎日目にした夕日の色、星空の輝きは、表現をする土台となって私の中にあります。今させていただいている舞台は時間が長く体力的にハードなので、健康維持の大切さを実感していますが、お客様の笑顔に元気をいただける毎日です。私にとっては舞台が「生きる薬」なんです。

【河口】生物は遺伝子的に強いものでなければ生き残れないので、突然変異を起こしたりします。芸術もそれと一緒でサバイバルです。目の前の流行を追うだけでは生き残れません。私は作品を作っている間はそれに没頭します。アイデアは設計して生まれるものではなく、あるとき突然あふれ出てきます。周りには美術系の人がたくさんいますが、私は小さいころ自然の中で遊び回った原体験を元にしたサイエンス系から入ったのが良かった。違う分野のことも後で役に立つからです。また江戸時代に活躍した画家の葛飾北斎は、70歳代で描いた富嶽三十六景で知られます。この時代の平均寿命は45歳なので、創作に対するパワーが強いと、体もそれについていくのだと思っています。

鹿児島に観光客を呼ぶためのポイントは

【河口】本土最南端にある鹿児島は、南国のパッションにあふれた土地。その割にはコンクリートが多くて、"ご当地"を感じさせるものが少ないような気がします。自然や神話など地元の人にとっては当たり前すぎるものの中に、都会の人が飛びつくものが隠されています。だからそこにしかないものを徹底的に伸ばしたらいい。おいしい食べ物と飲み物はすでにあるから、後は芸術が欲しいですね。観光客を呼ぶにはどうしたらいいかとよく聞かれますが、イタリアにミケランジェロがいたように、

鹿児島にも美術的な才能を持つ人が必要ではないでしょうか。芸術は観光の中心になりえます。またこれからは鹿児島が誇る宇宙・深海の分野が武器になると思います。

【愛華】東京から故郷を眺めると、「少しアレンジするだけで、もっと人が飛びつくようなおしゃれなものになるのに…」と思うことがあります。私は病気になったときに、故郷があるありがたさを感じましたが、東京の人には「故郷をつくりたい」という思いが強いようにも感じられます。そういう人たちと田舎を結びつけられたらいいですね。また金沢21世紀美術館に県外からも多くの人が訪れるのを目にすると、古いものの中に新しいものがあるとか、かやぶき屋根の家と現代アートの融合とか、"カッコイイもの"に人は引き付けられるのだと思います。鹿児島は奥ゆかしい人が多いから、もう一歩踏み出す気持ちを持てばいいのかな。「できない…」と思うと絶対にできない。でも「できる」と思うと、どうにかできてしまうものですよね。鹿児島の発展のためにもぜひ頑張ってください。

輝く未来のために

【河口】人を集めるのは、祭りや芸術だと思うんです。外国人旅行客の多いシンガポールや、バリ島のウブド地方が成功例ですね。ウブドは空港から車で一時間の自然豊かなところですが、バリ芸術の中心地として知られ、世界中から人々が訪れます。であれば鹿児島にもシンガポールのシンボルであるマーライオンに負けないものを作ったらいい。歴史や神話が多いのだから、それをテーマにしたモニュメントとか、「宇宙ルリカケス」とかね(笑)。ないものを生み出し、進化させるためには、薩摩焼や薩摩切子、大島紬のような伝統工芸品とCGとのコラボもおもしろいでしょう。伝統工芸品も芸術も放っておくとすたれてしまう一方です。作品を新幹線のホームに置いて観光客に見てもらうのもいい。ロケットの打ち上げショーやリオのカーニバルのような夜通しのアートフェスティバルもいいね。子どものころのワクワクした気持ちを追求していけば、何かが見つかるような気がします。

【愛華】女性は「自分へのごほうび」って好きですよね。旅行先でのお土産は、ステキな小物が手の届く手ごろな値段であったらうれしいですね。あと女性は現実的なので、実用性があるものを求めるような気がします。

河口先生のデザインをもとに窪田織物(株)が製作した本場大島紬(平成25年10月10日記念会見)
(左:本場大島紬振袖「Mutation」、右:本場大島紬「ルリカケスのドローイング」)